

「大石内蔵助は討ち入りの夢を見るか？」関連資料

1. 出来事

年表：<http://chushingura.biz/nenpyo/nenpyondx.htm>

日付	出来事（青字は創作部分）
元禄 14 年(1701 年)	
3/19	5:30 頃に一番駕籠赤穂到着、第二報は足軽飛脚で時刻不明。深夜に二番駕籠到着で内匠頭切腹と遺体引取り連絡
3/20	藩札の引換開始
3/26 頃	吉良上野介が健在だと判明
3/27	第 1 回大評定：処分の嘆願が認められなければ全員で切腹と決まる。 60 名が神文を提出、大野九郎兵衛が退席
3/28	第 2 回大評定：戸田采女正からの開城諭告使が到着。内蔵助と大野九郎兵衛は浅野本家に開城と家臣の退去を申し出ることにする。
3/29	第 3 回大評定：この頃の家臣の感情は、大学の家督相続が実現しなければ、城で討死にするというのが主流となる（籠城と切腹）。大石の意向に従う者が署名する。彼らの中には1 周忌頃には浅野家再興はなるだろうと気軽に署名した者もいたであろう。 「吉良上野介殿の仕置きを求めているのではない。一同納得がゆくよう、筋を通して下さい」という書状を多川九左衛門と月岡次右衛門に託して受城使の目付荒木十左衛門と榊原采女に提出することが決まる。
3 月末	片岡源五右衛門、田中貞四郎、磯貝十郎左衛門、中村清右衛門が江戸から帰着。 大石内蔵助は、片岡たちを呼び出して、我々の考えに同意するでしょうと言ったところ、「存寄」があるので同意しかねると返事があったようです。 赤穂では大石内蔵助のもと殉死切腹派が主流であり、吉良を討つという主張とは異なっていたため、赤穂を去る。
3/29	多川九左衛門と月岡治右衛門を江戸の取城大目付の荒木十左衛門と榊原采女に対する嘆願使として派遣。「我が藩は無骨な家臣どもばかりなので、上野介様への処断がはっきりしないと開城を納得させられない」旨の、すなわち吉良義央への処分を求めるもの。しかし荒木と榊原は 4/2 に江戸を出発（4/16 に赤穂に到着）していてすれ違う。 4/4 夜に江戸に到着した。彼らは大石の「江戸家老には見せるな」という命令に背いて江戸家老の安井彦右衛門にこれを相談し、4/5 に安井は浅野家親族の戸田采女正氏定に報告した。驚いた氏定は「開城こそが公儀を重んじた内匠の意思のはず」とする内容の書を月岡と多川に渡し、大石に届けさせた。4/11 に赤穂に帰着。
4/5	藩庫を開き、累減率で分配する
4/12	赤穂城明け渡しが最終的に決定 大野九郎兵衛が夜半に逃亡
4/14	4/5 に江戸を出発した堀部安兵衛、高田郡兵衛、奥田孫太夫が夜に到着(江戸で人数集まらず)、大石に籠城を主張。大石は「自分もそう思って嘆願使を遣わしたが、使いの不手際で、

	<p>江戸家老を通じて戸田氏定と浅野大学の知るところとなってしまう、二人から滞りなく城を開けるようにとの書状が来ている。それでも、強いて籠城したら浅野大学の指図のように受け取られ、大学殿を滅ぼし、浅野家の名跡まで失ってしまう」だから「此度之籠城相止、大学殿一分立候様に可罷成歟、安否之程暫可見届儀込、城無滞引渡候に相極候」と取り合わず。</p> <p>家老の立場もあるだろうからと大石内蔵助を除いて進めようと考え、組頭の奥野将監に相談したが奥野からも断られ、物頭連中にも相談したが断られる。</p> <p>そこで、大石内蔵助に再度面会し、その場で、大石内蔵助から「已後含も有之」という言葉を聞き、それならばと大石内蔵助に従うことにした。</p> <p>https://wheatbaku.exblog.jp/20383061/</p>
4/18	取城大目付の荒木、榊原に城内検分させつつ浅野家再興を要請
4/19	木下肥後守公定、脇坂淡路守に赤穂城を引き渡す。この間も再三再興を訴える 遠林寺に会所を作って残務処理を行う。
5/11	左腕に疔（毛囊炎）を発症
5/12	原惣右衛門を京の普門院六波羅蜜寺に派遣し、再興支援を要請する 堀部安兵衛、江戸に到着、内蔵助は両腕に疔(できもの)ができる→悪化して5/22に静養
5/17	原惣右衛門、大坂に行き、広島・三次浅野家に再考を嘆願する。 三次藩の大坂用人久保田源太夫宛ての手紙で、原は「家中の侍たちが、浅野家一門が揃って幕府に依頼すれば大学の再挙が叶うのに、なぜ大石はそれを嘆願しないのかと誤解して憤っており、黙って見てもらえない」と書いており、この時点では大石に同情的。
5/20	遠林寺の祐海を江戸に派遣し、宗門を通じて主家再興の事業に従わせる。
5/21	全ての書類引継ぎが終了
5/22	疔を再発して寝込む「後から発したできもので腕一面が腐ったようになった」と6/12の手紙に記載
6/24	百日法要を泉岳寺と赤穂花岳寺で実施 安井彦右衛門、堀部、高田、奥田の3人に同感同感と言いながら、磯貝十郎左衛門に「あいつらは料簡違いの奴らだ、放っておいたら斬りこむかも」と言う。磯貝を通じてそれを聞いた堀部は激怒する→江戸のメンバーはだめだ、西国と協調しよう
6/25	内蔵助、海路、大坂を経て山科に向かう
7/1	荒木十左衛門、大石の願いに希望があることを伝える
7/8	堀部安兵衛、仇討を急ぐよう書状を送る
7月	戸田采女正が内蔵助と小野寺秀和ら大垣に招いて浅野家再興について議論
7月	内蔵助、江戸の祐海に書状を送り、委任の旨を伝える
8/8	堀部安兵衛、仇討を急ぐよう書状を送る
8/19	吉良上野介の本所への転居が決まる。堀部、奥田、高田が瑤泉院のご機嫌伺いに行く。書状を内蔵助に送り、仇討を促す
9月初	原惣右衛門、潮田又之丞、中村勘助の3人を派遣するが逆に急進派になる
10/5	内蔵助、堀部にしばらく隠忍するよう書状を送る。

10/8	進藤源四郎と大高源五を派遣(9/18 出発)するが逆に急進派になる 10/9 原と堀部で、大石が江戸に来ることを促す
10/23	内蔵助、奥野将監、河村伝兵衛、岡本次郎左衛門、中村清右衛門と山科を出発(11/3 到着)
10/29	堀部、高田、奥田の3名が討ち入り決意の神文を作成、3月の一周忌までに討ち入る
11/10	江戸会議： 大石、堀部、原、進藤、奥野、河村、岡本、奥田、高田ほか15名 急進派が優勢で会議が進み、翌年3月までに結論を出すことを約束した。
11/14	不破数右衛門を内匠頭の墓前に連れ、義盟に加える。 荒木・榊原両目付を訪問し再興への援助を再要請する。瑤泉院を尋ねる(11/23 江戸出発)
12/9	中村勘助、潮田又之丞ら、山科の内蔵助邸に行き連判神文を作る
12/11	吉良上野介の隠居が認められる。江戸急進派焦る。堀部は原、潮田、中村、大高らと連携し、大石抜きでの討ち入りを検討する(この時は高田郡兵衛も同行)
12/15	大石主税、元服する
12/11-25	高田郡兵衛が脱盟。12/27 付内蔵助向けの手紙には「病気につき判形仕らず候」とあるので確実にそれ以前。12/25に原と大高が江戸を立つ時に堀部らは見送りに行っていない。
12/25	内蔵助「下手な大工が仕事を急いでいるのではないかと心配。今は地固めすべき」との手紙を江戸の三人に向けて送る(高田の脱盟はまだ知らない)
元禄15年(1702年)	
1/9	原と大高が京都に到着し大石と面談。上方勢の態度に落胆する。「小山はわからずやで呆れかえっている、二股かけているのではないか」との手紙
1/11	第一次山科会議 大石、原、大高、小山源五右衛門、進藤源四郎、岡本次郎左衛門、小野寺十内、矢頭右衛門七が参加、現状を協議
1/14	京都の寺井玄溪邸で会議を開く 萱野三平が自宅で自害
1/23	堀部、小山源五右衛門に、討ち入りに早く決心するよう伝える書状を送る
1/25	吉田忠左衛門、内蔵助に呼ばれ播州三木を出発。2/28に到着し内蔵助と協議
1/26	堀部・奥田が内蔵助に激しい口調の返事を送る(でも内蔵助がいないと人数が集まらない)
1/31	堀部、大高宛の書状で高田郡兵衛の脱盟を伝える
2/3	大高、内蔵助から離れて単独行動を行う旨の書状を堀部に送る「みなさまの西上は見合わせた方がいい、こちらは討ち入りの時節もまとまっていない」
2/15	第二次山科会議 3月の討ち入りを主張する急進派を内蔵助が指導し、大学の処分を待って行動するとの結論になる。討ち入り期限は3回忌に伸びる。そのことにより連盟者が120名ほどまで増える。原も頭数が揃わず、従わざるを得なかった。翌日に内蔵助は堀部にも書状を送る
2/16	大石から堀部への書状に「もし万が一ご公儀が黙認されたとしても上杉が黙っていない」と書いているので、大石は幕府の黙認方針を感じ取っていた?
2/21	内蔵助、吉田忠左衛門、近松勘六を江戸に送り京の意見を伝え、江戸派を鎮撫させる
3月	原、この頃から別行動を考え始める。
3/1	江戸から到着した武林唯七、不破数右衛門、大坂で原を盟主として討ち入りを促す

3/4	武林、内蔵助から山科会議の様子を聞く。大高、中村勘助も内蔵助に従っていたと知る
4/2	原、堀部・奥田に呼びかけて内蔵助から離れて討ち入る旨を内蔵助に伝える
4月	堀部、大石抜きでも14,5人は集まるとして、大学の処分を待たず再度討ち入りを計画。対立が強まる
4/15	内蔵助、妻りくと離別
	この頃から、内蔵助の遊里通いが始まる。
4月	内蔵助の遊びが過ぎるので、小山源五右衛門の薦めで、進藤源四郎が世話をした京都二文字屋の娘お軽が内蔵助の側女になる
5/3	堀部・奥田 4/2に原から届いた書状に賛成の意を申し送る
5月中旬	内蔵助、再び遠林寺の祐海を江戸に送り、再興のため最後の運動をさせる
5/21	内蔵助、堀部・奥田に自重をうながす書状を送る→6/15書状に、別行動はしないと返事するが水面下で行動する。
6/12	堀部が原、潮田、中村、大高、武林に対して、内蔵助と離れて行動した方が利益が多いと書面で伝える
6/29	堀部は上洛して原、大高と大石外しを相談。7月中に頭数を揃えて江戸に行く計画
7/18	大学の広島藩預かりが決まり、お家再興の目が消える 7/24に報告が上方に伝わる
7/28	円山会議(19名参加) 10月に江戸に下り討ち入ることを決定 大石内蔵助、原惣右衛門、間瀬久太夫、小野寺十内、大石主税、潮田又之丞、堀部安兵衛、大石瀬左衛門、不破数右衛門、岡野金右衛門、貝賀弥左衛門、大高源五、武林唯七、間瀬孫九郎、小野寺幸右衛門、矢頭右衛門七、三村次郎左衛門、岡本次郎左衛門、大石孫四郎 神文返して討ち入りの意志を確認
8/5	大高と貝賀弥左衛門に神文返しをさせる。
8/6	内蔵助、寺井玄溪の江戸下向を思いとどまらせる
8/12	隅田川船中会議 吉田忠左衛門、堀部、潮田で極秘会談
8/15	矢頭長助、大坂で病死
閏8月、 9月	小山源五衛門、進藤源四郎、奥野将監など多数の者が脱盟
10/7	大石 京を出発(潮田又之丞、近松勘六、早水藤左衛門、菅谷半之丞、三村次郎左衛門が同行、垣見五郎兵衛という偽名を名乗る)。途中の箱根で曾我兄弟の墓を参拝、墓石を削って持ち帰る。
10/26	内蔵助、川崎・平間村の軽部五郎兵衛邸に仮居を定め、ここから江戸に指示を出す。訓令十か条を発令する。11/5に江戸に到着。
12/2	深川会議 討入当日の詳細を決める
12/5	討ち入りの予定だったが、綱吉が柳沢吉保邸にお成りになり、市中が厳戒態勢のため断念
12/10	大高、大石三平、堀部のルートからそれぞれ、12/14に歳忘れ茶会があることを確認。
12/14	討ち入り(午前4時頃に堀部宅を出発、戦闘は二時間程度) 吉良側：死者15人、負傷者23人 赤穂浪士側：負傷者2人 数日前に降った雪が積もっていたものの、討ち入り当日は晴れ。また空には月が輝いてい

	た。月は満月に近いが、事件時刻には月は大分西の空の低い場所にあったため、月齢から考えるほど明るくはなかった。
元禄 16 年(1703 年)	
2/1	<p>上野寛永寺の公弁法親王が年賀のため綱吉に謁すると、綱吉は雑談の中で赤穂浪士の処断に苦慮していることを話題にした。綱吉はいったんは切腹を命ずる決裁を下していたが、浪士の命を惜しむ気持ちを捨てきれなかった。しかし将軍として彼らを許せば、かつて浅野長矩にだけ切腹をさせた自分の裁断は片手落ちであったと認めることになってしまい、将軍権力に傷が入ることが避けられなかった。そこで公弁法親王から助命があったということにできれば、あくまで皇族からの要請であるという形にできるので、それに基づいての赦免ならば将軍権力にも傷が入らないということを期待していたようである。</p> <p>また公弁法親王自身も浪士の討ち入りを義挙ととらえており、同年正月 5 日には浪士を褒める和歌も詠んでいたが、この時は軽く相づちを打つだけで受け流し浪士の助命を切り出すことはなかったという。綱吉はやむなく 2 月 4 日 (3 月 20 日) に処断を浪士預かりの諸藩に通達し、浪士は同日中に切腹した。</p> <p>後に浪士の助命を願わなかった理由を問われた公弁法親王は「本懐を遂げた浪士を生き永らえさせて世俗の塵に汚すよりも、切腹させることによって尽忠の志を後世に残すべきである」と答えたといわれる。また『堀部金丸覚書』には討入り後、堀部金丸(弥兵衛)らが輪王寺宮(公弁)を通じて公儀に訴え出て外聞を正そうとした記録が見られ、これをきっかけとして輪王寺が幕閣内の政争に巻き込まれることを避けたのではないかとする意見もある。</p>
2/4	切腹が決定、即日実施

2. 四十七士一覧

<http://www.hasebehp.sakura.ne.jp/meimeiden.htm>

(1) 上方穩健派

氏名	事柄(役職、禄高、役割、享年、辞世など)
大石内蔵助良雄 おおいしくらのすけ よしお(よしたか)	国家老、1500 石(譜代)。討ち入りの指導者。享年 45。辞世は「あら楽や思ひは晴るゝ身は捨つる浮世の月にかゝる雲なし」。
吉田忠左衛門兼亮 よしだちゅうざえも んかねすけ	足輕頭・郡奉行、200 石役料 50 石(譜代)。浪士の中では大石内蔵助に次ぐ人物として、これを補佐した。享年 64。辞世は「かねてより君と母とにしらせんと人よりいそぐ死出の山道」。 部屋住みの息子の吉田沢右衛門(29)と共に討ち入りに参加 足輕で参加した寺坂吉右衛門信行の主君
小野寺十内秀和 おのでらじゅうない ひでかず	京都留守居番、150 石役料 70 石(譜代)。享年 61。大石派として行動し赤穂城明け渡しでは内蔵助の右腕として働く。辞世は「今ははや言の葉草もなかりけり何のためとて露結ぶらむ」。

	養子の小野寺幸右衛門秀富(28)も討ち入りに参加。愛妻家で妻の丹宛の手紙が多く、丹は四十九日に自殺している。
間瀬久太夫正明 ませきゆうだゆうまさあき	大目付、200石役料50石(二代)。享年63。非常に厳格で真面目で寡黙。赤穂城明け渡しで残務処理に当たり、内蔵助の相談役。
近松勘六行重 ちかまつかんろくゆきしげ	馬廻、250石(譜代)。討ち入りの際に負傷する。享年34。 吉田忠左衛門と共に3月に急進派の説得を行う
大石主税良金 おおいしちからよしかね	部屋住み。大石良雄の長男。討ち入りのときは裏門の大將をつとめる。享年16(最年少)。五尺七寸(173cm)と大柄。辞世は「あふ時はかたりつくすとおもへども別れとなればのこる言の葉」。
寺坂吉右衛門信行 てらさかきちえもんのおぶゆき	吉田兼亮の足軽、3両2分2人扶持。 足軽 では唯一の参加者。討ち入り後に一行から立ち退いている。討ち入り時は38歳。事件後に幾つかの家に仕えた後、 江戸 で没。享年83。

- 小山源五右衛門 内蔵助の叔父(55) 足軽頭 300石。赤穂城の論争では大石派、開城後は京都に住んで浅野家再興に協力。神文返しの時に脱盟。内蔵助は寺井玄溪を通じて再考を求めたが、閏8月25日付の書状で再度脱盟を告げた。討ち入り後は脱盟を悔やんで剃髪し、山城八幡に住んで鳥居休澤と号した。
- 進藤源四郎 内蔵助の母方の大叔父(58) 足軽頭 400石 大石家とは重縁の深い関係。大石派として行動するがお家再興が絶望的になるとやる気を失って神文返しの時に脱盟、8/22付の書状で脱盟の意志を伝えた。浅野本家に仕えた叔父の進藤俊重が仇討ち参加を自重するように説得していたためとされる。
- 奥野将監(56) 組頭 1000石。赤穂城明け渡しに際して、家老大野知房が逐電したために、代わりに大石良雄を補佐して明け渡しを行った。奥野は大石良雄の義盟に加わり、御家再興運動でも引き続き大石を補佐した。しかし浅野長広の広島浅野宗家への永預けが決まり浅野家再興が絶望的になると、円山会議の直後に奥野は脱盟した。
奥野は一党の中では大石に次いで禄が高く、討ち入り後に細川家にお預けとなった大石は奥野の脱盟を大変に残念がっている。

(2)江戸急進派 堀部グループ

氏名	事柄(役職、禄高、役割、享年、辞世など)
原惣右衛門元辰 はらそうえもんもととき	足軽頭、300石(新参)。早くから江戸の急進派に同調していた。享年56。辞世は「君がため思もつもる白雪を散らすは今朝の嶺の松風」。直情的で短気な性格だが有能。文章にも長けている。弟の岡嶋八十右衛門常樹(38)も討ち入りに参加
堀部弥兵衛金丸 ほりべやへえかなまる(あきざね)	前江戸留守居、前300石、隠居料20石(譜代)。同志のうち最年長者。享年77。辞世は「雪はれて思ひを遂るあしたかな」。

<p>堀部安兵衛武庸 ほりべやすべえたけ つね</p>	<p>馬廻、200石。<u>越後国新発田藩</u>出身、旧姓中山。父の代に新発田藩を放逐となり浪人していたが、<u>高田馬場の決闘</u>での活躍により、堀部金丸の<u>婿養子</u>となり、赤穂浅野家の家臣となる。仇討ち急進派の中心人物。討ち入りでは大太刀を持って大いに奮戦したと伝わる。享年34。辞世は「梓弓ためしにも引け武士の道は迷はぬ跡と思はば」。</p>
<p>奥田孫太夫重盛 おくだまごだゆうし げもり</p>	<p>武具奉行・江戸<u>定府</u>、150石（新参）。仇討ち急進派の中心人物。享年57。養子の奥田貞右衛門行高(26)も討ち入りに参加</p>
<p>高田郡兵衛</p>	<p>200石。生没年不詳。宝蔵院流高田派開祖の孫で槍の達人。江戸急進派の中心人物だったが脱盟。 伯父の内田元知から橋爪新八という者を通じて養子になるようとの申し出を受けたが、郡兵衛は「存じ寄りある」と断っていた。しかしこれを聞いた内田は郡兵衛の兄・高田弥五兵衛の宅に行き、「存じ寄りのこととは敵討のことではないか。養子に來れば口を閉ざすが、來なければ村越伊代守（内田の上司の旗本）に訴え出る」と言い出し、ついに郡兵衛は討ち入り計画を口外しない条件でそれを受け入れたとされる。</p>
<p>大高源五忠雄 おおたかげんごただ お（ただたけ）</p>	<p>金奉行・膳番元方・腰物方、20石5人扶持。弟の小野寺幸右衛門秀富(28-小野寺十内の養子となる)も討ち入りに参加。吉良家出入りの茶人 山田宗扁に接近して12月14日の吉良屋敷で茶会があることを聞きつけた。俳諧をよくして俳人<u>宝井其角</u>と交流があった。享年32。辞世は「梅で呑む茶屋もあるべし死出の山」。</p>
<p>潮田又之丞高教 うしおだまたのじょ うたかのり</p>	<p>郡奉行、絵図奉行、200石（譜代）。享年35。妻が内蔵助の叔父の娘で、同じ奥村無我に剣術を学ぶなど内蔵助と親交が深く、行動を共にすることが多かった。義に厚く約束を重んじる人物。最初は大石派だったが9月の江戸下向からは急進派に変わった。 吉良義央を討ち取るとその首級を槍先に括りつけ引き揚げた。辞世は「武士の道とばかりを一筋に思ひ立ぬる死出の旅路を」。</p>
<p>不破数右衛門正種 ふわかずえもんまさ たね</p>	<p>元馬廻・浜奉行、元100石（譜代）。浅野内匠頭から閉門を命じられ浪人していたが懇願して義盟に加わる。討ち入りでは裏門を屋外で固める役であったが、じっとしてられず中に侵入し、二人を斬り倒し、吉良左兵衛に斬りかかった。左兵衛は逃げてしまったものの、別の一人と斬りあいをして倒す^[5]。斬り合いのしすぎで刀がささらのようになり刃が無くなるほどだったという^[5]。討ち入りでは最もめざましい働きをしたと伝わる。享年34。</p>
<p>横川勘平宗利 よこかわかんべいむ ねとし</p>	<p>徒目付、5両3人扶持（新参）。12月14日に吉良屋敷で茶会があることを調べ。享年37。辞世は「ましてしばし死出の遅速はあらんともまつききかけて道しるべせむ」。</p>

	刃傷の時は江戸にあったが、江戸屋敷が召し上げられたのちはすぐに赤穂城へ戻った。原元辰などに同調して殉死切腹を唱え、大石良雄の盟約に加わった。赤穂城開城後はすぐに江戸へ下向した。7月の円山会議で仇討ちが決定されたあと、大石良雄は関西一帯の同志達に大高忠雄や貝賀友信を使って神文返しをさせたが、横川は江戸の同志達に対して同じ神文返しを任されている。大石の信頼がかなり厚い人物であることが分かる。また討ち入り直前に知己への手紙の中で脱盟した同志たちのことを徹底的に罵っている。
<u>中村勘助正辰</u> なかむらかんすけまさとき	書物役、100石（譜代）。享年46。辞世は「梅が香や日足を伝ふ大書院」。

(3)江戸急進派 片岡グループ（行列襲撃してでもすぐに）

氏名	事柄（役職、禄高、役割、享年、辞世など）
<u>片岡源五右衛門高房</u> かたおかげんごえもんかふさ	側用人・児小姓頭、350石（譜代）。忠臣蔵では浅野長矩切腹の際に最後の対面をした。仇討ちを強硬に主張し独自の行動をとっていた。享年37。美少年で頭がよく、急速に出世した。
<u>磯貝十郎左衛門正久</u> いそが いじゅうろう ざえもんまさひさ	物頭・側用人、150石（新参）。享年25。美少年で十四歳の時に堀部弥兵衛の推薦で小姓となる。能・琴・学問・書画に通じ、内匠頭の寵愛を受ける。討ち入りのため母が危篤でも見舞いに行かず臨終にも立ち合わなかった。

- 田中貞四郎（片岡、磯貝に次いで浅野内匠頭の寵愛を受けていたが、酒に溺れ、梅毒で形相も変わるほど墮落。11月7日付けの書状で脱盟）
- 中村清右衛門（大義を見失い、討ち入りに異を唱える）

(4)それ以外の登場人物

- 戸田采女正氏定(43歳)

美濃大垣藩主で浅野内匠頭は母方のいとこ。事件後は連座で出仕を止められる。吉良への処分がなければ開城できないという内蔵助の書状を見せられて、開城こそ内匠頭の意志だとする書状を出した。浅野家再興に尽力した。

(5)四十七士その他

<u>吉田沢右衛門兼貞</u> よしださわえもんかねさだ	部屋住み。蔵奉行吉田兼亮の <u>長男</u> 。享年29。
<u>間瀬孫九郎正辰</u> ませまごくろうまさとき	部屋住み。間瀬正明の長男。享年23。
<u>赤埴源蔵重賢</u> あかばねげんぞうしげかた	馬廻、200石（譜代）。忠臣蔵では「徳利の別れ」で有名。享年35。
<u>富森助右衛門正因</u> とみのもりすけえもんまさより	馬廻・使番、200石（二代）。享年34。辞世は「先立し人もありけりけふの日をつひの旅路の思ひ出にして」。

<p><u>岡野金右衛門包秀</u> おかのきんえもんかねひで</p>	<p>部屋住み。美男で忠臣蔵の物語では大工の娘を通じて吉良屋敷の凶面を手に入れている。享年 24。辞世は「その匂ひ雪のあさぢの野梅かな」。</p>
<p><u>小野寺幸右衛門秀富</u> おのでらこうえもんひでとみ</p>	<p>部屋住み。小野寺秀和の養子。享年 28。辞世は「今朝もはやいふ言の葉もなかりけりなにのためとて露むすぶらん」。</p>
<p><u>木村岡右衛門貞行</u> きむらおかえもんさだゆき</p>	<p>馬廻・絵図奉行、150 石（譜代）。享年 46。辞世は「おもひきや我が武士の道ならで御法のゑんにあふとは」。</p>
<p><u>奥田貞右衛門行高</u> おくださだえもんゆきたか</p>	<p>部屋住み。奥田重盛の養子。近松勘六の異母弟。享年 26。</p>
<p><u>早水藤左衛門満亮</u> はやみとうぎえもんみつたか</p>	<p>馬廻、150 石（二代）。刃傷事件の第一報を江戸から赤穂へ伝える。享年 40。辞世は「地水火風空のうちより出し身のたどりて帰るもとのすみかに」。</p>
<p><u>矢田五郎右衛門助武</u> やだごろうえもんすけたけ</p>	<p>馬廻・江戸定府、150 石（二代）。享年 29。</p>
<p><u>大石瀬左衛門信清</u> おおいしせぎえもんのぶきよ</p>	<p>馬廻、150 石（譜代）。享年 27。</p>
<p><u>間喜兵衛光延</u> はざまきへえみつのぶ</p>	<p>勝手方吟味役、100 石（二代）。享年 69。辞世は「草枕むすぶ仮寐の夢さめて常世にかへる春の曙」。</p>
<p><u>間十次郎光興</u> はざまじゅうじろうみつおき</p>	<p>部屋住み。間光延の長男。吉良上野介に一番槍をつけ、その首級をあげた。享年 26。辞世は「終にその待つにぞ露の玉の緒のけふ絶えて行く死出の山道」。</p>
<p><u>間新六郎光風</u> はざましんろくろうみつかせ</p>	<p>間光延の次男。養子に出されたが養父と折り合いが悪く江戸に出て浪人になっていた。願い出て義盟に加えられた。享年 24。辞世は「思草茂れる野辺の旅枕仮寝の夢は結ばざりしを」。</p>
<p><u>千馬三郎兵衛光忠</u> せんば（ちば）さぶろべえみつただ</p>	<p>馬廻、100 石（二代）。享年 51。</p>
<p><u>菅谷半之丞政利</u> すがやはんのじょうまさとし</p>	<p>馬廻・郡代、100 石（譜代）。享年 44。</p>
<p><u>村松喜兵衛秀直</u> むらまつきへえひでなお</p>	<p>扶持奉行・江戸定府、20 石 5 人扶持（二代）。享年 62。辞世は「命にもかえぬ一をうしなはば逃げかくれてもこゝを逃れん」。</p>
<p><u>村松三太夫高直</u> むらまつさんだゆうたかなお</p>	<p>部屋住み。村松秀直の長男。享年 27。辞世は「極楽を断りなしに通らばや弥陀諸共に四十八人」。</p>
<p><u>倉橋伝助武幸</u> くらはしでんすけたけゆき</p>	<p>扶持奉行・中小姓、20 石 5 人扶持（二代）。享年 34。</p>
<p><u>岡嶋八十右衛門常樹</u> おかじまやそえもんつねしげ</p>	<p>札座勘定奉行、20 石 5 人扶持（二代）。原惣右衛門の弟。享年 38。</p>

<p><u>矢頭右衛門七教兼</u> やとう (やこうべ) えもしちのりかね</p>	<p>部屋住み (譜代)。父長助ともに義盟に加わったが仇討ち決行前に父は病死した。享年 18。</p>
<p><u>勝田新左衛門武堯</u> かつたしんざえもんたけたか</p>	<p>札座横目、15 石 3 人扶持 (譜代)。享年 24。</p>
<p><u>前原伊助宗房</u> まえばらいすけむねふさ</p>	<p>金奉行・中小姓、10 石 3 人扶持 (二代)。江戸で呉服屋を開き吉良屋敷を探索した。享年 40。辞世は「春来んとさしもしらじな年月のふりゆくものは人の白髪」。</p>
<p><u>貝賀弥左衛門友信</u> かいがやざえもんものぶ</p>	<p>中小姓・蔵奉行、10 両 3 人扶持 (新参)。吉田兼亮の<u>弟</u>。享年 54。大高源五と共に円山会議後の神文返しを行う。</p>
<p><u>杉野十平次次房</u> すぎのじゅうへいじつぎふさ</p>	<p>札座横目、8 両 3 人扶持 (二代)。享年 28。</p>
<p><u>神崎与五郎則休</u> かんざきよごろうのりやす</p>	<p>徒目付、5 両 3 人扶持 (新参)。享年 38。辞世は「余の星はよそ目づかひや天の川」。</p>
<p><u>三村次郎左衛門包常</u> みむらじろうざえもんかねつね</p>	<p>台所奉行・酒奉行、7 石 2 人扶持 (二代)。享年 37。</p>
<p><u>茅野和助常成</u> かやのわすけつねなり</p>	<p>横目付、5 両 3 人扶持 (新参)。享年 37。辞世は「天の外はあらかじな千種たに本さく野辺に枯ると思へは世や命咲野にかかる世や命」。</p>

以上